

# 江戸時代における『源氏物語』の俗語訳

— 解釈と弄び —

レベッカ クレメンツ  
Rebekah CLEMENTS

## 一. はじめに

近世における古典文学の享受・受容史の研究は近年で盛んになりつつあるとはいえ、多くが注釈書を対象とする論文であり、他の享受資料の研究は比較的未開拓である。本発表では、『源氏物語』を中心に、江戸時代における古典の俗語訳について考えたい。『伊勢物語』『古今和歌集』の俗語訳はもちろん、江戸時代から明治初期にかけて、抄訳を含め、約十二書の『源氏』の俗語訳が出されている。『源氏物語』の早期俗語訳を紹介し、考察しつつ、訳者の目的と読者層とを調べたい。なお、これらの作品は現代の研究者によく「俗語訳」と呼ばれてきたが、実は著者は「訳」という言葉を自分の作品に対して使っていない。「俗語訳」という言い方は別に誤解ではないと思うが、訳者自身が、俗語訳という作業について利用した用語や比喩などを考察しながら、古典文学受容史における俗語訳の意義について考えたいと思う。

『新訳源氏物語』まで、『源氏物語』の訳書のほとんどは『源氏物語』最初の方の巻々を訳したものであるが、『湖月抄諺解』と『源氏物語賤の苧環』のような完訳もみえる。また、『紫文蟹の囀』は宿木巻まで訳している。著者の多賀半七が病死したために最後まで訳せなかったとの注記が写本の奥にあることから、完訳するつもりであったことが分かる。享保八年刊（一七二三）の『紫文蟹の囀』から天保十一年刊（一八四〇）の『源氏遠鏡』までの百十七年の間、ほとんど流布していると推定される写本として存在した『湖月抄諺解』を除けば、なぜか訳書に相当するものはみられない。

それでは、『風流源氏物語』、『若草源氏物語』等の「梅翁源氏」と、『紫文蟹の囀』、について、すなわち初期俗語訳を中心に発表したいと思う。

## 二. 『風流源氏物語』

最初の源氏俗語訳といえるものは都の錦による『風流源氏物語』である。周知の通り、都の錦は穴戸光風という人物の筆名で、元禄年間のポピュラー作家であった。『風流源氏物語』は元禄十六年（1703年）に刊行されたが、その前の年に都の錦は『元禄曾我物語』『御前伽婢子』『女訓徒然草』『風流神代卷』『風流日本莊子』を出している。これらの作品も日本や中国の古典、または歴史のエピソードを元にしたものである。

「俗語訳」または「パロディ」と呼ばれてきた『風流源氏物語』は原作の『源氏物語』にみられない外的な要素を多く含んでおり、「訳」といえないのではないかとの疑いもあるだろう。有名な「いづれの御時にか」から始まるのではなく、都の錦は先ず「恋」について述べている。それから、『源氏物語』の冒頭部に相当する箇所があるが、「いづれの御時にか」ではなく、帝を「人王六十代醍醐天皇」と特定してから、

御傍にかしづく女御女御とは後の次なり数はさだまらぬなり更衣数十二人みかどの御服をあつかふ女官なりあまたさふらひ給ふ中、いとやんごとなき位ならねど按摩大納言のむすめ、桐壺の更衣と申すはすぐれて時めく花のかほ二八の春のあけほのや…<sup>①</sup>

と書いている。桐壺の更衣の描写がこの後長く続くが、ここで指摘したいのは原作を分かりやすく訳している面もあれば、割注、描写、隠語などを追加している所もあることである。そしてその後は『長恨歌』についての説明文が追加されている。この部分について都の錦は、自分が書いたようにしているが、神谷勝広氏のご指摘によると『歌行詩諺解』に基づいていると考えられる。

近年の川元ひとみ氏の論文に、『風流源氏物語』では、都の錦は長編化を試みているとのご指摘がある<sup>②</sup>。確かに、原文と対応しない部分には特に写実的な描写が著しく、都の錦は、原作にみられない小物や衣類などの描写を訳文に挿入しながら、井原西鶴を代表とする近世作者たちのように、より長くより写実的な作品を目指していたといえるだろう。

しかし、その上に、銜学者として知られている都の錦は、『源氏』の知識、または解釈を読者に提供していると私は考える。序文において、都の錦は有名な注釈書に対する不満を次のように書いている。

むかしの恋しり俊成、定家、紫の紐を解青表紙を被て、源氏不<sub>レ</sub>見哥誦は無下の事なりと此君等の睨をうけ適かの巻に望ながら、教なければ誦曲になづみ、只唯蓬生の宿に住で一露の雫に口を雪ぎ、湖月の陰に嘯、或は河海に船を寄、岷江入楚の底を探る、しかはあれど道のみ分ざれば難<sub>レ</sub>知をのづから花鳥の音に鳴ねはりするもの不<sub>レ</sub>少それを歎きの余り…藤咲く門の口をやはらげ…

つまり、教師がいなければ、注釈書——言及する順番でいえば『萬水一露』『湖月抄』『河海抄』『岷江入楚』『花鳥余情』——だけでは物足りないので、読むべき『源氏物語』を理解するには都の錦による「やわらげ」が必要だとの主張である。

「和らげる」は古来より「分かりやすくする」という意味を持ち、江戸時代において「口をやはらげ」（または口和らげ）という言葉は、外国語——特にオランダ語を日本語に翻訳することの意味で使われていた。考えてみれば「訳」と「解釈」は実に密接に関係しており、都の錦は現代でいう「俗語訳」によって『源氏物語』を、教師がない読者のために分かりやすく解釈していると考えられる。序文のもう一箇所に紫式部の「筆をかみやわらげて」とある

のもこの意味であろう。さらに割注、振り仮名、説明文の追加などで、都の錦は自分の学力を誇張しつつ、読者に『源氏物語』について説明している。

### 三. 梅翁源氏

『風流源氏物語』の奥書によれば、都の錦はその続きを出版するつもりであったが、元禄十六年（一七〇三）江戸へ下る途中、無宿改布施孫兵衛に見とがめられ、宝永六年（一七〇九）の大赦まで収容されていた。宝永四年（一七〇七）に箒木巻（雨夜品定のあと）から始まる訳『若草源氏物語』が「梅翁」と名乗る作者によって刊行され、『風流源氏物語』の後を引き継いだのである。

梅翁は、その『若草源氏物語』をはじめ、宝永四年（一七〇七）から宝永七年（一七〇九）にかけて四部の著述によって桐壺巻から花宴巻に至るまでの俗語訳を完成した。挿絵は岡村正信による。『国書総目録』では、梅翁と正信が同人物であるというようにあるが、正信が梅翁源氏の挿絵を書いたこと以外、証拠は不明である。

梅翁源氏は『風流源氏物語』より原文に近い訳といえる。しかし、特に巻の冒頭部において、近世化や挿入が見当たれる。

ひかるきみ　かのなかがわ　き　のかみ　かたかへ　ひとよやと  
光君。彼中川の紀伊守がもとに方違とて。一夜宿らせ給ひしおりふしは。  
なつ　たいところ　すべ  
夏のよのあつさしのがんそのために。局も腰もとも臺所へ下りて。見る  
人もなし。さわ〜<sup>これ</sup>是からは。われ〜<sup>おひ</sup>がたのしみ帯もひもゝときすて。  
ゆ　な　ら　う　ち　わ　て　せん　た　な　よ　い  
湯もじひとつになつて。奈良団扇をかた手にもちながら膳棚をさがし。宵  
の御客様へもてなしののこり。本時のはつ茄子。かのわたりの白瓜漬も  
あるは…　（『若草源氏物語』（版本）桐壺巻冒頭部（翻刻クレメンツ））

ここで深く採り上げる余裕がないので、資料をご参照くださればと思う。

都の錦と同じく、梅翁も自分の作品は『源氏』に関する知識を教えるためのものだと主張している。『若草源氏物語』作者序文では、『源氏物語』を「吾朝

の至宝」とし、「<sup>べつし</sup>別て女子に道をおしゆるの<sup>てだて</sup>術」としてふさわしいので読むべき作品だと書いている。そして、都の錦と同じく、梅翁は注釈書にまで言及している。

扱<sup>すこし</sup>又少しもこゝろざしあらん人は。本書にひき合<sup>あはせ</sup>てこの草昏を見給はゞ。諸抄<sup>あつむ</sup>を集るに<sup>およばず</sup>不及。本文の義理よく聞ゆべし。<sup>③</sup>

注釈書を率直に批判しているのではないが、専門的に勉強したくない限り、わざわざ多くの注釈書を集めなくてもよいとのことである。かわりに『若草源氏物語』を使いながら原作を読めば、原作の「義理」がよく分かってくるだろうという。また、序文のもう一箇所に「むらさき式部のほんゐにまかせ」たと原作に対する忠実さも主張している。

しかし、『源氏物語』を読むための補助的要素だけではなく、『若草源氏物語』の題名自体と、第一の序文における題名の解釈を考えれば、原作『源氏物語』にとって代わる存在だとする姿勢さえも示唆されている。

六十帖をかゝれたる昔のよねの筆の跡を。今の世の。紫帽子の。色を含める言葉に写して。根に通ひける野辺の若草という心にや

周知の通り、ここは、『源氏物語』若紫巻の光源氏の歌「手に摘みていつしかも見む紫の根に通ひける野辺の若草」を引いている。原作における「若草」は幼い紫の上であって、「紫の根」とは叔母の藤壺と血がつながっているとの意味である。藤壺に対する未練を持っている光源氏が、「紫の根に通ひける」若い紫の上を藤壺の代わりに自分のものにしたいと考えている場面である。これと同様に、原作の『源氏物語』を理解し自分のものにできない読者がいるだろうが、かわりに同じ「紫の根」、つまり原作の作者紫式部とつながる『若草源氏物語』があるという意味であろう。

さて、『若草源氏物語』の読者はいかなるものか。梅翁は特に女性読者に注目している。作者序文において、「ちいさき娘」が「づぎ<sup>おなご</sup>の女子まじり」で『風流源氏物語』を読んでいる場面を挙げており、「いかなることをかきたるものぞと。よませてき、侍りしに。源氏物語を。当世<sup>いまのよ</sup>の俗語に写して桐壺は、木<sup>ふた</sup>の二まきをかけり」と梅翁が娘たちを通して初めて『風流源氏物語』に出会うというふうにかかれていいる。また、『源氏物語』を「別<sup>べつし</sup>て女子に道をおしゆる<sup>てだて</sup>の術」としており、「いまの世のはやりことばにうつし。下がしもの品くだれる。賤山がつのむすめにいたるまで。いろはのもじをおほゆれは。これをよむにかたらず」とある。さらに、途中で終わってしまった『風流源氏物語』の続きの訳を娘たちに頼まれて、梅翁は『若草源氏物語』を「見て鳴を止よとて少娘子にとらせ」たのである。つまり、梅翁によると、『風流源氏物語』が女の子に読まれ、『若草源氏物語』も若い娘達のために書かれたものであることが分かる。もちろん、女性と子供のために書いたというのは、自分の作品をへりくだってという、常套表現であって、読者は女性と子供に限られていなかったことも考えられる。「下がしもの品くだれる。賤山がつのむすめにいたるまで」という表現は、外の読者層も示唆していると言ってもよかろう。

次に、俗語訳という作業について梅翁がどのような言葉を利用したかについて考えたい。先の引用「いまの世のはやりことばにうつし」にみられるように、梅翁は俗語訳について「うつす」という言葉を利用している。『若草源氏物語』の作者序文において『風流源氏物語』も「当世<sup>いまのよ</sup>の俗語に写して…かけり」とある。「訳」という言葉を利用しなかった理由は想像するしかないが、『源氏物語』の言葉を遠く離れた別の言語とは認識していなかったためであろう。なお、梅翁の序文において、うつすは漢字で「写」と書いている例もあるが、多くは仮名で表記している。これは『源氏物語』を真似て書いたという意味であろうし、或は内容が紫式部の『源氏』から自分の作品に位置を変えたと、移動する意の「移す」の響きもあるだろう。ともかくも、梅翁は遠く離れた外国語ではなく、時間的に隔てのある『源氏物語』の言葉を「当世」のことばに置き

換え、分かりやすくしたと考えていたのであろう。

#### 四. 『紫文蟹の囀』

最後に享保八年刊（一七二三）の『紫文蟹の囀』について話したい。『風流源氏物語』と梅翁源氏は、完訳していないが、『紫文蟹の囀』は、空蟬巻までの版本の他、宿木巻までの写本がある。作者多賀半七は最後まで訳すつもりであったが途中で病死してしまったと写本の奥書に書かれている。半七は、版本によると「甲陽府中仕官」であった。

『風流源氏物語』と梅翁源氏は読者を楽しませるための要素を有しているが、『紫文蟹の囀』はより学問的な性格が強い。『群書一覽』で当該書は『源氏物語』本文、注釈書・概要書と一緒に載せられているが、『風流源氏物語』と梅翁源氏は載せられていない。『紫文蟹の囀』は訳文の後や頭に語釈を載せており、作者による「趣向」と「凡例」では、方法などを明確に論じている。なお、ここでも、『源氏物語』を「大和ぶみの<sup>やまと</sup>最第一、無上の<sup>むじやう</sup>至宝<sup>しほう</sup>」としつつ、注釈書の代わりに自分の著作を勧めている。

尤<sup>もつとも</sup>諸抄物<sup>しよせうもつ</sup>に委<sup>くは</sup>しといえども、其<sup>その</sup>冊数<sup>さつず</sup>繁多<sup>はんた</sup>なれば、或<sup>ある</sup>は貧窮<sup>ひんきう</sup>にして、こと  
〜く<sup>あつ</sup>集め<sup>み</sup>見る事<sup>え</sup>の得<sup>え</sup>がたき人あり、あるひは世路<sup>せいろ</sup>にいとまなうして、心  
をとどめて見<sup>み</sup>がたき人あり、又は病身<sup>びやうしん</sup>にして、つら〜みるに物うきもあり  
り…耳<sup>み</sup>ちかき<sup>ぞく</sup>俗語<sup>ご</sup>をもつて本文<sup>ほんもん</sup>の詞<sup>ことば</sup>を解<sup>げ</sup>し…<sup>④</sup>

注釈書は冊数が多くて値段も高く、また一方では時間がとれなかったり病身だったりして、とても読み通せないという人たちがいるとした上で、このような読者のために原文を俗語によって解しているとする。前述したように、都の錦も同じく注釈書に迷ってしまう教師のいない読者のために『源氏物語』を解釈していると書いた。また、「趣向」の別の箇所半七は「俗語をもつて引なをしたる趣向は、普<sup>かつ</sup>て中人以上のためにはあらず、下つかたの人」と書いている。これは梅翁の「下がしもの品くだれる。賤山が<sup>かつ</sup>つむすめにいたるまで」

という表現を思わせる。要は、身分の比較的低い読者のためにあるという意味だろう。

俗語訳という作業について、半七は前の二人とまた別の表現を利用している。「趣向」において「俗語に引なをしたる」、「俗語をもつて本文の詞を解し」や「俗語を添て其意をたし」などが見られる。「俗語に引なをしたる」とは梅翁の「うつす」というイメージによく似ており、『源氏物語』の内容を自分の作品に置き換えたというニュアンスだろう。また、「俗語をもつて本文の詞を解」すや「俗語を添て其意をた」すという表現は「訳」と「解釈」の近い関係を示しており、注釈書の代わりに『紫文蜚の囀』を書いた半七にとっては、俗語訳と解釈は密接していた。

## 五. 結び——近世における俗語訳の意義——

最後に、本発表の副題「解釈と弄び」に触れたいと思う。拙稿では主に解釈の方に注目し、弄びを取り上げていない。従来、『源氏物語』の早期俗語訳に関する研究は少ないが、これらの作品の外的要素、特に『風流源氏物語』の猥褻な隠語に引かれ、失敗作という捉え方が多い。あるいは、梅翁源氏の冒頭部に近世化が見られるため、「翻案小説」ではないかという疑問もあるだろう。確かにこの二つの作品は時に驚くような要素を有しているが、これは源氏解釈という面がなくなっているわけではあるまい。梅翁はまさにこの問題について触れている。

所々にあらぬたはふれ事をくはへたるは。よむ者倦んことをおそれて。わらひをもよほしねふりをさまさんがためなり

第一の序文において、『若草源氏物語』が紫式部の「根に通ひける」役割と同時に「玩べきもの」ともいわれている。これらの俗語訳、特に『風流源氏物語』と『若草源氏物語』は楽しみながら、『源氏』に関する知識を獲得したい

という読者のためでもあった。

なお、ここでは深入りできないが、17世紀の俗語訳『伊勢物語』である『伊勢物語ひら言葉』の作者紀暫計も、自分の作品は女性を楽しませるためのものであると書いている。

此『業ひらむかし物語』といへるは、さすがに和歌の秘する所の『伊勢物語がたり』の面影を、かくいやしきことのはに述べやはらぐる事、空おそろしき事に侍れど、全哥書にはあらず、たゞ児女のもしほ草をひろひよみ覚て、むかし〜かふあつたといへる、むかしがたりにもならむかし

そして、『ひら言葉』の本文を確認すると、実は注釈書からの解釈も明らかに含まれていることが分かる<sup>⑤</sup>。つまり、俗訳『源氏物語』と同じパターンが窺えるのである。今後の課題にしたいが、俗語訳は古典文学の近世における受容史を物語る大事な資料と考えてよかろう。

#### [注]

- ①『国書刊行会叢書』第五卷『近世文芸叢書小説（下巻）』（一九九一年）による。
- ②川元ひとみ「近世小説と『源氏物語』——『風流源氏物語』を中心に——」（伊井春樹 編『江戸時代の源氏物語』おうふう、二〇〇七年）、130頁～131頁。
- ③序文の引用は井浦芳文「梅翁源氏の初作「若草源氏物語」——二つの序文を中心とする考察——」（東京大学教養学部人文科学科紀要）第五五号（一九七二年五月）による。
- ④引用は『珍書刊行会叢書』第五冊「紫文蟹の囀」（一九一五年）による。
- ⑤今西祐一郎 校注『通俗伊勢物語』東洋文庫五三五（平凡社、一九九一年）、「解説」。

#### \* 討議要旨

今西祐一郎氏は、「やわらげ」の本義を説いた上で、この言葉をさらに訳すということは、すなわち江戸時代における『源氏物語』の問題、ひいては古い時代の古典の問題でもあると評した。また、発表者が「俗解」や「俗語」という言葉を用いたことについて、『通俗三国志』を例に挙げ、江戸時代では一般的に「通俗」という言葉が使用されていたことを指摘した。